みんなの文芸

引間豐作選　投稿数24句

怒るとき青のまぶしき子かまきり　下田野　中田　久恵

（評）蟷螂はどこにでもいる昆虫で、そのほとんどが緑色をしていて、気の強さは蜂と同様に平気で人間に向って来る。秋の交尾がすむと雌は雄を頭から食べてしまうので、雄の死骸は残らない。

古人の諺にかまきりの卵嚢が地面より高いと、その冬の積雪が多いと言われたが、雪に埋もれてしまうと卵が死滅するので、それを避ける生きものの智恵だと思う。

掲句、怒らせると青色のかまきりが輝き、それが幼いというから尚更面白く、今度見かけたら鎌よりも身体の色彩を観察しよう。

後の月揺らす懸樋や庭の池　三沢　新井　民子

誘われて手さぐりの径蟲すだく　下日野沢　引間富美子

鬼やんま妻の帽子にまた止まり　下田野　藤原　道男

無住寺のしろさるすべり高処より　下日野沢　高山　ユウ

SLを見送る土手の曼珠沙華　皆野　大沼シヅ子

胡麻を刈る予報は明日雨という　皆野　新井　茂

飛鳥路や天に連なる曼珠沙華　下田野　藤田　稔

秋夜長墨の香りに筆を持つ　三沢　横田　龍雲

秋蝶の窓に見舞いし車椅子　下日野沢　山本ミチノ

ふりむかば金剛石婚木犀香　三沢　田中　利章

凌霄の落ちて静まる花の色　皆野　関口　未紀

稲掛ける眞上にトンボの羽光る　三沢　横田ハルジ

中田國太郎選　投稿数17首

狭庭辺に香りかすかに流れゐて秋を見つけし今朝の木犀　金崎　山田　雅子

（評）日常生活の中でふだん見慣れている自然の中から、歌材を発見し、一首に詠みこむことは、意外と難しいものである。作者は、狭い庭の片隅にかすかに匂い始めた木犀の香に気がつき、秋を強く感じた。その感動を結句で「今朝の木犀」と今朝と時を限定して表現した。これが作者の力量である。木犀の香を詠んだ秀句が俳句には多いが、短歌には意外と見付からない。窪田空穂の一首「我がおもひ言葉となるか秋の日の木犀に染みて香とかをる時」新井作農に生き坦々と八十歳の感慨を詠む。笠原作秋の夜の静寂が漂う。眞下作秋分以降に急に日が短くなる実感がこもる。

農に生き秘訣などなく傘寿なる慶寿の祝いに招かれてゆく　皆野　新井　茂

もくせいの甘き香りの漂ふて裁ち縫ふ部屋に夜の深けゆく　皆野　笠原三江子

日短とゴルフを急かすアナウンス聞きつつ縁に地下足袋を脱ぐ　三沢　眞下　杏子

弟よおめえも短歌をようするな初めて誉めし米寿の兄貴は　皆野　金子善次郎

愛らしく日毎知恵増す曾孫等よこの幸せを亡夫に分けたし　下日野沢　浅見　豊子

悲惨なる悪事に不安つのりゆき道徳心の乱れなげきぬ　皆野　新井　愛子

モザイクの雲の朝なり台風の被害放映不安な小雨　上日野沢　四方田利男

峡口の畑に乱れるコスモスに吾が専農の影ぞ薄るる　三沢　新井　民子

戦没者の遺族こぞりて靖国の英霊を偲び今あるを思ふ　三沢　新井　叶子

背を丸めコタツで笑う大正生れ理に積む話に貰う幸福　下田野　安井　光代

不自由な病気の友を挟け合い家族と思い情を注ぐ　下日野沢　山本ミチノ

新じゃがを万能高く土起す掘り終りたりふっと息はく　皆野　塩田　千代

俳句・短歌を募集

作品には、ふりがなをつけ、住所・氏名を明記して総務課へお寄せください。

8日必着

1人1句、1首に限ります。

長生荘　11月1日から改装オープン

長生荘が11月1日から営業を再開しました。町ではこれまで長生荘において、ふれあい広場などの介護予防事業を実施してきましたが、今後も長生荘を介護予防事業推進の拠点とするため、国の補助金を受けて、整備を進めました。

大広間の畳の入替え、トイレの洋式化、また、館内の通路のカーペットなどを新しくしました。今後とも長生荘をご利用ください。

なお、**営業時間は、午前10時から午後6時まで**となりました。

問合せ　長生荘（シルバー人材センター）　☎62-4625

大広間

通　路

お風呂

トイレ